

日本と中国における巖歌苓研究

楊 暁 文

一、日本における巖歌苓研究

巖歌苓という作家は日本ではほとんど知られていない。それゆえ、巖歌苓文学に関する研究を語る前に、まずその日本語訳に触れておきたい。

平成十一年十月二十五日、角川文庫の一冊として角川書店から初版発行された『シュウシュウの季節』は日本語に翻訳された巖歌苓の初めての小説集となる。訳者は阿部敦子氏である。この翻訳は、巖歌苓の夫であるアメリカ人ローレンス・A・ウォーカー氏による英訳短編集『White Snake and Other Stories』(by Geling Yan Translated by Lawrence A. Walker Aunt Lute Books San Francisco 1999) をもとに構成されたものであるらしい。

巖歌苓についての基礎的な知識を訳者も調べているようで、以下において、同文庫の最後にある「訳者あとがき」から巖歌苓の生い立ちなどに関する部分を引いてみることにしよう。

巖歌苓の小説が日本語で翻訳されるのは、この『シュウシュウの季節』が初めてです。そこでまずは、作者の人となりについて、簡単にご紹介いたします。

巖歌苓は、一九五八年、上海に生まれました。

十二歳のときに人民解放軍に参加し、以来十三年間、演出隊のダンサーとして、四川省やチベットの草原地区を公演してまわり、そのとき目にした光景が、後に「シュウシュウの季節」や「リング売りの盲目の少女」などの作品に反映されていると言えるでしょう。

一九八六年、中国作家協会に加入し、その年、最初の長編小説『緑血』を、翌八七年には『一個女兵の悄悄話』を上梓しています。一九八九年、天安門事件の年、“政治的に不適切な”長編、『雌性的草地』を出版した巖歌苓は、弾圧から逃れるようにして、アメリカに渡ります。¹⁾

ここの「巖歌苓は、弾圧から逃れるようにして、アメリカに渡ります」について、筆者は異議を唱えたい。

巖歌苓は前後二回にわたって渡米している。一回目の渡米についてはその帰国後の一

九八九年八月に発表したエッセー「一天的断想」のなかでのみ語っている。この文章をよく読んでいくと、つぎのような二つの点が分かってくる。

ひとつは当時の嚴歌苓がある程度の知名度を有し、中国大陸の文壇で確実な地歩を占めていたことである。一九八六年二月、人民解放軍における権威的な出版社である解放軍文芸出版社から嚴歌苓の長編小説『緑血』（緑色の軍服を着た軍人は祖国にとって緑色の血、という意）が刊行され、「十年優秀軍事長編小説獎」を受賞し、同年全国規模の「中国作家協会」の一員となった。二作目の『一個女兵の悄悄話』（ある女性兵士のひそひそ話）は翌年八月に「解放軍報最佳軍版図書獎」に輝き、同じく解放軍文芸出版社より世に送られた。一ヵ月後、中国唯一の英字新聞「China Daily」に嚴のことが紹介される。それを目にしたアメリカ大使館文化担当官からの一本の電話が嚴のアメリカ訪問のきっかけをつくった。「私はこのたびの訪問をある意味では、そこそこの成功と見ていた」と嚴自身はこのエッセーのなかで書いている。

いまひとつはアメリカ文学への嚴歌苓の関心である。電話でどのようなアメリカ作家に会いたいかと聞かれたとき、「私は何人ものまだ健在であろうと思われる作家の名前を一気に言い放った」のは、その関心度の高さを示している。「改革開放」の時代に入ったとはいうものの、一般的に外国人作家の作品を原文で読める人が少なく、ごく限られた訳文を通して世界文学（『世界文学』という名の翻訳専門誌もあるが）事情を知るしかない中国の状況下、「何人ものまだ健在であろうと思われる作家の名前を一気に言い放つことができるほど、嚴はアメリカに代表される外国文学を重要視し、そこから懸命に文学的養分を吸収すべく努力していた姿勢が浮かび上がってくる。そして、この姿勢に文学修業そのものを目的とする嚴歌苓の二度目の渡米の思想的基盤を見いだすことができるだろう。

とはいえ、二度目の渡米にあたり、嚴歌苓は大きな決断に迫られていた。

前回の渡米がアメリカ側の招待であり、フィラデルフィアやワシントンやニューヨークを満喫する「十ヵ月にわたる国外生活。訪問、旅行、流浪、いずれと呼んでもよい（「一天的断想」）」ような経済的心配がいささかもなかったのとは完全に異なり、渡米前の出国手続きだけで「ほとんど私の全財産（「出国出国出国」）」を使い果たしたうえ、まったくの私費留学生という選択に壮士去って返らぬ如く、背水の陣の気配すら感じられなくもない。現に自分自身を頼りにアメリカをめざす二度目の「出国の思いにきわめて深刻なものがあつた（前掲）」という嚴の告白が筆者の分析の正しさを立証する。

私費留学生としての渡米を決意した時点の嚴歌苓の年齢のことも考慮に入れなければならないであろう。一九五八年生まれの嚴が「三十歳の年にもっとも急いだのは出国のことだった。年甲斐もないことを仕出かすようなもので、気分がすぐれず、恥ずかしくもあつた」（「出国出国出国」）。洋の東西を問わず世界中に散らばっている中国人留学生

は十代や二十代の若者が圧倒的多数を占め、「三十にして立つ」べき嚴にしてみれば、年齢的に競争力に欠け、留学生としてほとんど何の優勢もないといっても過言ではなからう。そのうえ、「アメリカは試験が避けられない（考场心電図）」国だ。TOEFLやGREなどが米国留学希望の外国人を苦しめてやまないことは周知の通りである。なのに、アメリカ留学にすべてを賭けた嚴は生まれつき「怖いことが怖くないことより多い。注射が怖い。床屋に入るのが怖い。歯医者さんの椅子が怖い。もっとも怖いのは試験」(前掲)。その試験科目は当然のことながら嚴の苦手な英語である。語学を始めるには遅すぎるくらいの「三十歳になった年からABCを習い出し、十七ヵ月の苦学を経てついに五七七点という好成績で渡米の資格を獲得した」²⁾ ことから嚴歌苓の決意の固さが伝わってこよう。

経済的圧力、年齢的不利、言語上のハンディキャップ。そうした外在の困難を抱えたうえ、長年中国で営んできた文学事業、プロの作家として認められることを意味する中国作家協会への入会を達成させた創作上の実績、これらによって文壇に築いてきた地位など(中国華僑出版公司による『中国当代青年作家名典』がそれを物語る)をことごとく捨て、ゼロからのスタート地点に立ちアメリカに渡ろうとする嚴歌苓の決意の底に、もっと深い何かがあったに違いない。

それは一体何であろう。

掘り下げれば嚴歌苓のなかに生じた自らの文学に対する危機感が渡米の真因だと考えられ、その背景には一九八九年六月四日に起こった「天安門事件」の存在が指摘できる。

アメリカ留学前、嚴歌苓はすでに『緑血』『一個女兵的悄悄話』『雌性的草地』という長編三部作を出版している。なかでも三作目の『雌性的草地』を「私はずっとこの本を十年にわたる文学創作の代表作だと思っている」と明言している。「この小説において、私は自らに他の一切を顧みる余裕さえなくすような大きな課題を課した」(「一天的断想」)。そしてそれをクリアしただけに、先に引いた明言に滲み出ている自負と偏愛が生まれたのである。その『雌性的草地』が、なんと「八九年六月七日、天安門広場での銃声がまだ消えやまぬうちに世に問うた(「從雌性出發——代自序」)」のではないか。その後、全国的に逮捕、政治学習、密告推進キャンペーンなどが行われ、書物の発売禁止が見受けられ、文学界における嚴の友人の多くは筆を断ち、中国を代表する新聞「人民日報」と「光明日報」に予定されていた『雌性的草地』についての評論の掲載も取り止めとなった(前出参照)。

嚴歌苓の筆になる天安門事件に言及した文章からは当時の政治への失望や不安、ひいては不満が伝わってき、将来への展望が全然ひらけない個人的現実、創作に専念するに適さない政治的雰囲気、自らの追求する文学空間の出現が期待できない社会的状況等諸々の悪条件が嚴歌苓に危機意識を募らせ、最終的に渡米への決意を決定的なものにしたと

思われる。

日本で見られる嚴歌苓についての紹介（つまり、前掲した「嚴歌苓は、弾圧から逃れるようにして、アメリカに渡ります」）では、その渡米は消極的な逃避であるというニュアンスで言及されているが、筆者はむしろそれを彼女の進取の気性のなせるわざと評したい。理由はその留学時に選んだ専攻、及びその専攻が嚴歌苓に与えた影響は測り知れないからである。

追い求める文学が中国で出来ないなら、アメリカでその実現を目指す。この決意を胸に、一私費留学生として、嚴歌苓はふたたびアメリカの土を踏んだ。留学先はシカゴにあるコロンビア-カレッジ（Columbia College, Chicago）であった。

「私の学校は芸術学院である」と嚴歌苓はコロンビア-カレッジ時代を懐かしむエッセー、「我的美国同学与老师」のなかでこう書き出している。九十年代の中国人留学生の大多数が卒業後高収入の約束される経済学部や商学部に殺到したのに反して、嚴は一九九〇年、進んで芸術学院であるコロンビア-カレッジに入学し、文学創作学部の Creative Writing という劇、小説、シナリオなどを書く創作コースの修士課程を選んだ（のちにその学位を取得した）。この選択にこそ、深い意味がある。

「私はこの学部の百年余の長きにわたる歴史上唯一のアジア人（前掲）」として注目を浴びるが、中国人留学生はおろか、アジア留学生としても初めてのケースであったということは、嚴の選択がいかに珍しかったか、いかに稀であったかを雄弁に物語っている。

「改革開放」の政策がとられて以来、数え切れないほどの中国人作家、芸術家が次々と大陸本土を離れ、世界各国へと飛び散っていった。しかし居住国の文芸創作についての勉強を始めようとする例はほとんどないどころか、「数多くの作家や画家は国外でその文学活動あるいは芸術活動に終止符を打ったのだ」³⁾。これを裏返していえば、同じ中国人作家だった嚴歌苓の選択は外国文学を学び、世界文学に近づき、それらの積極的な受容を通して伝統的な中国文学の限られた天地から脱出し、より広い視野を獲得し自らをより豊かにする可能性を意味するものである。

この選択は同時に、燃えるような意欲で新たな挑戦に立ち向かう嚴歌苓の渡米の動機を我々に改めてうかがわせる鍵でもある。つまり、嚴歌苓は自らの意志でアメリカに渡ったのである。

さらに、嚴歌苓は渡米したばかりの頃、カルチャーショック、異文化間の摩擦による挫折、経済面における困窮、精神的な不安などが原因で、中国へ帰るか、アメリカに残るか、と真剣に迷ったことがあったという事実にも注目すべきである（嚴「写在电视连续剧『海那边』之后」参照）。すなわち、弾圧から逃れる立場であれば中国に戻れるはずもないが、事実、彼女は真剣に中国へ帰ることを考えてもいたのであった。

以上を総合して、筆者は、「嚴歌苓は、弾圧から逃れるようにして、アメリカに渡りま

す」との紹介に異議を唱えたのである。

阿部敦子氏の翻訳を意識しつつ、巖歌苓作品の第二の日本語訳者・櫻庭ゆみ子氏が登場してくる。巖の短篇「ライム色の鳥」の「訳後記」につきのような記述がある。

巖歌苓の作品の邦訳は、昨年十月、角川文庫より『シュウシュウの季節』として一冊出ている。作家の夫であるローレンス・A・ウォーカー氏の訳による英訳“White Snake and Other Stories”をもとに構成した（表紙も英訳本と同じものを使っている）ということである。（季刊『中国現代小説』第Ⅱ巻 第十五号 通巻第五十一号 二〇〇〇・春 二十八頁）

櫻庭ゆみ子氏が巖歌苓作品を翻訳する動機といえば、通巻第五十一号の後に訳し出された「ラスベガスの謎」の「訳後記」において、氏はこう語っている。

今回も五十一号に引き続き巖歌苓。同じくアメリカに渡った中国人の話である。作品の執筆は<ライム色の鳥>よりも前。私が読んだのもこちらの方が先である。そもそも巖歌苓のものを物色してあちこち雑誌をあさっている時に見つけたのだが、<ラスベガスの謎>などという題がいかにも（中国国内の）読者うけを狙っているようだったし、アメリカ人と結婚している「わたし」に生身の作者が見えすぎているようにも思われて少々引っかけ、それで脇に置いておいた作品。賭博に見入られていく人間の性というテーマも割りにありふれているし、結末もなんとなく予測できそうなところ、対象との距離、ショック度、意外性で<ライム>の方に軍配をあげていた。それが、例会でたまたま張頤武氏にお会いした際、氏が<ラスベガス>を絶賛していたので、それでは、と訳してみた次第である。（季刊『中国現代小説』第Ⅱ巻 第十七号 通巻第五十三号 二〇〇〇・秋 一三一頁）

巖歌苓文学における「ライム色の鳥」と「ラスベガスの謎」の位置づけについて、筆者は筆者なりの考えをもっているが、それはさておき、「<ラスベガスの謎>などという題がいかにも（中国国内の）読者うけを狙っているようだった」点が、筆者にも同じような印象を残した。現に同じような発想によってか、巖歌苓自身とローレンス・A・ウォーカー氏との恋愛及び結婚（巖にとっては再婚）のプロセスが小説の題材となった「FBI監視下の婚姻」は「一個美国外交官和大陸女子的婚姻」という題でも読者の目に触れ、その後の長編小説『無出路咖啡館』においても、二人のロマンスが二番煎じで書かれている。

筆者の入手した、櫻庭ゆみ子氏による巖歌苓作品の翻訳は以下の通りである。

「ライム色の鳥」

(季刊『中国現代小説』二〇〇〇・春 第Ⅱ卷 第十五号 通巻第五十一号)

「ラスベガスの謎」

(季刊『中国現代小説』二〇〇〇・秋 第Ⅱ卷 第十七号 通巻第五十三号)

「アダムとイヴと (上)」

(季刊『中国現代小説』二〇〇三・春 第Ⅱ卷 第二七号 通巻第六十三号)

「アダムとイヴと (下)」

(季刊『中国現代小説』二〇〇三・夏 第Ⅱ卷 第二八号 通巻第六十四号)

翻訳だけではなく、巖歌苓に関する文章をも櫻庭ゆみ子氏が書いている。その文章は、雑誌『アジア遊学』(毎月1回20日発行)の第九十四号(二〇〇六年十二月二十日発行)に掲載された。

『アジア遊学』第94号は特集・「中国現代文学の越境」である。具体的には「中国現代小説界の中核」「中国現代小説の新たな展開」「海外に広がる中国文学の世界」「香港と台湾」「中国現代小説とメディア」に分けられ、その「海外に広がる中国文学の世界」に収められた五つの文章のひとつは、櫻庭ゆみ子氏が執筆した「宴会BUG——巖歌苓——境界領域からの発信」である。

巖歌苓による英文小説のタイトルはTHE BANGUET BUG。櫻庭ゆみ子氏は「「宴会のたかり虫」とでも訳すべきこの一冊の中篇」と書いているが、その内容について氏は以下のように紹介している。

それは、北京の缶詰工場でレイオフの憂き目に遭った若者が、偶然にある企業団体主催の宴会に迷い込んで豪勢な食事を味わったことに味をしめ、フリーランスの新聞記者という触れ込みで、各種団体の主催する宴会に押しかけては山海の珍味を味わい「お足代」をただ取りするうちに、期せずして正義の味方の役を演じる羽目になる話である。貧しい農村出身のダン・ドンは、宴会の豪勢な食事を堪能しているさなか、ひょんなことから建設現場の労働者が不動産屋に搾取される悲惨な生活を「取材」したり、公正な裁判を経ずに死刑となった姉を持つ風俗営業で働く娘に不正を訴える代弁を頼まれたり、また、人気落ち目の老画家にその素朴さを気に入られて、財産目当ての取り巻きから作品を守る運搬作業をさせられたりするようになり、同情と打算で近づいてきた雑誌記者の娘に半ば引きずられるようにして、不正を暴く正義の記者へと変身を試みるが、自分と同じく貧しい農村出身の純情可憐な妻にフカひれスープを味わわせようとしたことから足がついて……⁴⁾

以上のようなストーリーを展開させた THE BANGUET BUG は、これまで上梓されてきた巖歌苓の作品と比較してみた場合、たいへんすぐれているものとは思えない。中国語読者向けの小説というよりも、本音はむしろ中国といえば中華料理を連想してしまうほどの欧米人読者のうけを狙っていたのではないか。現に巖歌苓関係の書物において、この小説がただ中国語題——「赴宴者」で言及されるだけにとどまり、しかも中国語による正式な出版（同一の作品を台湾と中国の両方で出版したり、英語版を中国語に戻して刊行したりするのが、「華文作家」や「華人作家」の流儀である）がなかったのがその傍証となろう。

いままで、巖歌苓はあわせて三つの英語バージョンの作品を欧米に送り出している。前掲した『White Snake and Other Stories』、Cathy Silber によって英訳された長編小説『The Lost Daughter of Happiness』、そしてこの『THE BANGUET BUG』。前二者は人の手によって英語作品になったのに対して、後者は巖自身の書いた初めての英文小説であった。この意味において、巖にとって『THE BANGUET BUG』は記念すべき作品ではあるが、その文学的才能の到達点を示すような創作とは言いがたい。

日本での巖歌苓に関する研究の正式なスタートは二〇〇四年十二月二十八日、汲古書院から初版発行された論文集『境外の文化——環太平洋圏の華文学』によって切られた。具体的にいうと、その論文集に所収の筆者の論文——「在米華文作家巖歌苓の文学」によってである。

ここではこの論文が書かれるまでの経緯を述べることにしたい。

早くも一九九〇年代の前半、巖歌苓がアメリカに渡り、苦学しながら小説を書いては台湾に投稿し、ようやく受賞の夢が現実のものとなり、その影響も徐々に中国大陸へと及んでゆく頃のことであった。初めのうちは、大陸で多くの読者をもつ文芸雑誌『小説月報』において、「転載」という形でその作品が掲載された。最初に読んだのは短篇小説「海那邊」であったと記憶する。タイトルのもつ象徴性、作品のコンポジション、人物像、とくにその筆致（この場合の中国語の専門用語は「文筆」「文字」）に魅せられた。以来、巖歌苓の作品をむさぼり読み、巖歌苓の文学世界のなかにのめりこんでいったのである。こうした蓄積、下準備がのちの論文につながった。

論文作成の直接のきっかけは山田敬三先生を代表とする基盤研究Aの遂行であった。先生のおかげで、「環太平洋圏の華文学に関する基礎的研究」と題するテーマで科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））の交付を受け、二〇〇〇年春から二〇〇四年まで、四年間にわたり約二十名の方々とともに共同研究を行った。とくに二〇〇二年三月二十六日～二十八日、アメリカのカリフォルニア大学サンタバーバラ校において開催された「台湾文学与世華文学国際研討会」への参加は、この論文を書こうとする気持をいっそう

強くした。

二、中国における巖歌荅研究

巖歌荅研究がようやく始まったばかりの日本とは対照的に、中国における華文文学研究のなかでもっとも多く語られ、もっとも注目を浴びている作家の一人は巖歌荅その人である。

しかし、これまでに発表されてきた巖歌荅に関する論評には大きな問題点があるように思う。つまり、読後感的な性質をもつものが大多数を占め、しかも論評の対象が一部の作品に偏るきらいがあり、他の作品とのかかわりあいのなかでこれを取り上げられることがあまりなかった。

拙論発表後の新しい資料を駆使しながら、この問題点についての分析をさらに深めていきたい。

二〇〇六年七月、中国世界華文文学学会と吉林大学の共催により、「第十四届世界華文文学国際學術研討会」が中国東北部・長春市にある吉林大学で開かれた。その成果を反映した『世界華文文学的新世紀——第十四届世界華文文学国際學術研討會論文集』（吉林大学出版社、二〇〇六年七月）をめくってみると、多くの論文が何らかの形で巖歌荅に言及しており、なかでも詹乔の『『扶桑』中的中西人物形象対読』と江少川の「文化視野人性開掘 現代叙事——評巖歌荅新作『第九位寡婦』」はタイトルが示しているように、巖歌荅の作品論である。

『扶桑』はアメリカへの中国移民の一世のなかに含まれていた一人の娼婦、すなわち扶桑、と彼女のところへ足繁く通う白人の少年、つまり克里斯（クリス）との間におけるロマンスである。

詹乔の論文は「一、扶桑——人神一体的中国娼妓」「二、克里斯——理想幻滅的白人救世主」「三、結語」という三部構成で、貴重な発見や意見が随所にちりばめられてはいるが、巖歌荅による他の歴史小説、たとえば『人寰』や『一個女人的史詩』との比較研究をも視野に入れて『扶桑』を考察すれば、小説家の巖歌荅における歴史観のようなものが見えてくるのではないだろうか。それを踏まえて『扶桑』を読み返せば、『扶桑』への理解もいっそう深まるであろう。

これまでアメリカへの中国移民を題材に、巖歌荅は最初の移民の話である『扶桑』、移民二世の物語である『風箏歌』『乖乖貝比（A）』を小説化してきた。「もともと歴史の流れに沿って書いていくつもりでした。彼らの運命の変遷をたどり、最後に私自身まで書こうと思っていましたが、何彼と支障があり、ご覧の通り、ほんの少ししか書き上げていない」⁵⁾ という最近の彼女の告白に、新たな歴史小説の出現に期待が持てるかもしれない。

巖歌苓その人にとときには電話インタビューをも試みる江少川の「文化視野 人性開掘 現代叙事——評巖歌苓新作『第九位寡婦』」は、『世界華文文学的新世紀——第十四屆世界華文文学国際學術研討會論文集』の時点では巖の新作についての論評である。

巖歌苓の台湾文壇におけるデビューは中国大陸文壇での正式なデビューをも意味していた。中国語でいう「曲線救国」の成功例である。以来、彼女は年に一冊くらいのペースで力作を世に送り出してきた。多作の作家であると同時に、作品の質の高さでも高く評価されている作家である（この点において、巖歌苓は、ただ量だけで勝負する量産型の流行作家とは異なる）。ゆえに、世界華文文学、とくにその代表的な女流作家の一人として、種々様々な立場に立つ人々が巖歌苓に注目している。ただ、その新作が次々と世に出てくるので、「新作」としてそれを論ずる場合、すぐまた巖歌苓の新しい作品が生まれてくる可能性が高いことを念頭に入れてその「新作」の限られた「新」を認識しておく必要もあるのではないだろうか。

さて江少川の「文化視野 人性開掘 現代叙事——評巖歌苓新作『第九位寡婦』」であるが、その時点における巖歌苓の新作について論じようとするスタンスである。ただ、その内容に触れる前に、一つのみスを指摘しておきたい。つまり、巖歌苓には、『第九位寡婦』という作品がない。正しい情報はつぎのとおりである——書名：『第九个寡婦』、出版社：作家出版社（北京）、二〇〇六年三月初版第1刷発行。

江少川論文は二章からなっている。その第一章はこの長編小説の筋の紹介を中心に展開され、第二章は西洋現代小説からの技巧の受容について述べている。そして、作中人物の「朴同志」の、小説の主人公である王葡萄への片思いに関する書き方がいかに伝統的な叙述スタイルとは異なっているかを語って論文を終わらせている。

本章の最後に、現時点での中国大陸における新鋭学術誌『世界華文文学研究（第五輯）』（安徽大学出版社。二〇〇八年十二月初版。この学術誌は年に一回出版）の巖歌苓関係の論文に触れていきたい。

倪立秋の論文「新移民小説的特質」が二〇〇〇年十月十二日、中国系作家として初めてノーベル文学賞を受賞した高行健（彼はフランス国籍の中国人である。だから「中国系作家」と巖歌苓を同列に扱っていたことを評価したい。それくらい巖歌苓は実力もっているからである。羅四鴿の論文「新移民作家“香蕉故事”的突破与困惑——論施雨、王瑞芸、陳謙等新移民作家小説的文化意義」は施雨、王瑞芸、陳謙といった新世代の華文作家を研究するものであったが、その比較の対象として一九八〇年代、一九九〇年代の華文作家の筆頭に巖歌苓の名前を挙げている。そして、この学術誌に所載の筆者による中国語論文「華文女作家筆下の同性恋世界——以巖歌苓、虹影、黎紫書的作品为中心」は、同性愛の作品を手がかりに、巖歌苓及び虹影、黎紫書の文学の知られざる側面に光をあてたものである。

三、巖歌苓の世界——むすびにかえて

最近、巖歌苓について考えていることをこの章において整理し、ひいてはその作品世界への新たな読みの可能性を探る糸口としたい。

(1) 美しき中国人（華人）像と醜き中国人（華人）像

巖歌苓の作品にいろいろな人物が登場してくるが、美しき中国人（華人——ここでの華人とは居住地での国籍を取得した中国系住民をさしている）と醜き中国人（華人）に大別できるのではないかと思われる。以下、具体的な作品を手がかりにその人物像の分析を試みる。

渡米初期の「習作」の段階を経て、巖歌苓は『少女小漁』のような、今日彼女の代表作とみなされる作品群を創り出すにいたった。ここでは、まず『少女小漁』を例に巖の美しき中国人像を考察する。

彼女は小柄だったが、ずっしりと豊かな胸と尻をしていた。こうした女は子育てに適し、苦しい労働によく耐えるが、おつむが弱いと間々言われる。おつむが弱い女は大抵気立てがいいものだ。さもなくば、十七歳で看護婦になったりなどしなかつただろう。大陸で——最近では祖国のことを“大陸”と呼ぶのに慣れていて——彼女はだれも構おうとしない人々の看護をした。彼らはみな死ぬ前に、口をそろえて、なんて気立てがいい娘だと言い置いて逝くのだった。出国にあたっては、出国するためなら自殺や殺人ですら厭わない人間だっているのに、涼しい顔して出国できるとは、よい報いがあったものだとされた。

小漁は彼が出てくるのを見てぱっと破顔した。だれもが称賛する、なんの邪念もない笑顔である。⁶⁾

上記のような小漁だけではなく、巖歌苓の構築した美しき女性像には、「おつむが弱い女は大抵気立てがいいものだ」という共通点が存在しているようである。現に、この小漁のほかに、『扶桑』のヒロインである娼婦・扶桑や、『第九个寡婦』の年をとっていても心は童心のように純真無垢な若き寡婦・王葡萄などはいずれもそうである。

とくに小漁の場合、「なんの邪念もない」からこそ、恋人の江偉の勧めでオーストラリアの市民権を得るために外国の老人と偽装結婚をしていますが、その善良さが捨て鉢になっていた老人を感化し、さらに彼を自力更生の道へと導いた。やがて、「契約」により老人と別れる日が来た。

老人は玄関に去って行く彼女を見送った。彼女はさよならを言うために戻ろうとして、老人の靴のかたっぽうがひっくり返っているのに気づいた。思わずそれをきちん

と並べ直しながら、ふいに、ひょっとすると老人は、もはやこの靴を履くことはないのではないか、という思いにとらわれた。彼女の老人に対する気配りは、単に老人に手痛い自覚をもたらしたただけだったのだ。では、彼女自身にとっては？彼女自身にとって、この挙動は口実だった。彼女はあとしばらく彼に付き添い、彼にもっとなにかしてあげるための口実が必要だったのだ。

「わたし、また戻ってくるから……」

「戻らなくていい……」

彼の目は窓の外を見ていた。その目はあたかも、外は素晴らしいんだよ、出てきなさい、また戻ってきたりしてどうする？と言っているかのようだった。

老人の手が微かに動いた。小漁は自分の手も動かしたい衝動を感じた。彼女は老人の手を握りしめた。

「もし……」

老人は彼女を見た。物言いたげな瞳だったが、老人はなにも言わなかった。ただ、己が無謀さに驚いたかのように、大きく目を見開いていた。「もし」なんなのか、彼女の方でも尋ねなかった——「もし」に続く言葉は、いくら尋ねても尽きることがないだろう。もしきみがあと何日かいてくれたら、どんなにいいだろう？もしわたしが死んでも、きみはわたしのことを覚えていてくれるだろうか？もし幸運にも葬式をあげてもたえとしたら、きみは参加してくれるだろうか？もし将来きみがだれか孤独な老人を見かけたら、わたしのことを思い出してくれるのだろうか？

小漁は頷いた、彼の「もし」に答えて。

老人が首を傾けると、落ちくぼんだ眼窩にたまっていた涙が、ついに流れ落ちた。⁷⁾

思うに、偽装結婚をしている二人、すなわち小漁と老人の関係は利用しあう関係にあった。にもかかわらず、善良な小漁が老人の面倒をみたり、その心のケアをすることによって、二人の関係は偽装結婚以上のものとなった。それゆえ、上記のような偽装結婚とは考えられないほどの心の交流は二人の間にあった。孤独な「老人が首を傾けると、落ちくぼんだ眼窩にたまっていた涙が、ついに流れ落ちた」その人間味あふれる小説のラストシーンに、どの読者も強く胸をうたれるであろう。阿部敦子氏の言葉を借りていえば巖歌苔の表現しようとしている「小漁の捉えどころのない聖性」⁸⁾が美しき中国人(華人)像をみごとに成就せしめたのである。

一方、醜き華人(中国人)像も巖歌苔の作品にあった。

注は長い間、船員をしていた。彼は香豆のことが好きだった。「香豆とは、ほかでもなく、注がはじめて知り合った若い女性であり、注が海に出て戻ってくるたびに通りを隔ててうっとり見つめていた、聖マリア教会の階段をしとやかにおりてくる中年の女性

である」⁹⁾。「香豆はその半生、折を見ては注に読むことを教え、注も口汚い船乗り言葉以外の英語を繰ることができるようになった」¹⁰⁾が、片思いの彼は「恋愛というものがわからなかった。恋愛は注にとっては、想像の中で彼女の身体に何らかの行為を加えることだった」¹¹⁾。種々様々な原因により、二人は結ばれなかった。半身不随となった香豆はとうとうあの世へ逝ってしまい、年老いた注だけが残された。彼は香豆のオウム、ジェミーを引き取った。

一年が経ったある日の午後、香豆の生前住んでいた部屋に騒々しい音をともなってメキシコ人の一家族が引っ越してきた。夫婦と八歳の男の子である。その子の名前はペドロである。ペドロの父親は庭師で、朝は早く帰りは遅い。母親は毎日部屋とバスルーム掃除の仕事を二軒分しているの、やはり夕食時までは帰れない。ペドロは学校が引けてから夕食までの間、いつも注のところで過ごすようになった。注は自分がペドロの両親にうまい具合に使われていることはわかっていたが、彼も彼なりにうまい具合にペドロを利用していった——彼は毎日、ペドロに成人向けのポルノ小説を読ませているのだ。

注の視力では、どうやっても本の活字は読めなかった。彼はペドロに読ませ、聞いていた。ペドロにしたってオウムとそうかわりはしねえ、吐き出す言葉と脳みそはなにもつながっちゃいないのさ、と注は思っていた。ペドロが「彼女のそのピンク色の乳首はまるで二粒のイチゴの餡のよう」と読み上げるとき、脳のほうはこの言葉の意味するところにまるで追いつかないのだ。少年は、小学校二年生の例にもれず、分からない単語でも、アルファベットにしたがって似かよった音を発することはできた。八十パーセントの語彙は、舌と唇で何とかそれらしい発音になったままで、これはオウムの口真似とよく似ていた。

だからペドロは、自分が大声で読み上げているこの本が、いわゆる「成人向け読み物」であることを知らなかった。少年は「唇がゆっくりと這い上がり、舌先がまず新鮮な乳首を味わった」という文が何を言っているのかわからなかった。ペドロには意味も分からず発音もできない語句がかなりあり、注はそのアルファベットをひとつずつ自分の手のひらに書かせた。ペドロが右手の人差し指で注の手のひらのもっともくすぐったい箇所に一文字一文字書きつけると、文字が書きあがる過程で起こるこそばゆさと、目に見えぬ場所で並べて組み合わせられたアルファベットが生み出す秘密の意味あいに、注は思わず薄笑いを浮かべた。注はこのような笑いを浮かべるとき目を閉じていたが、灰色のレンズの下で薄紙のような臉が小刻みに激しく痙攣しているのがペドロには見えた。ペドロの目には、この老いた中国人のこのときのこうした笑いはひどく奇怪なものに映った。(中略)例のかび臭くばらばらになり始めた注の「成人向け読み物」を、ペドロはすでに半分ほど読み進めていた。重要

なくだりにくると、注は何度も繰り返すように少年に命じた。少年はときおり上の空で、いつジェミーが天気予報を聞かせてくれるだろうかと考えていた。そんな時少年はめっちゃくちゃな読み方をしたので、登場人物たちの動作も混乱をきたし、とんでもないことになった。すると注は、喘息の発作が起きたように激しくせきこみ、息を詰まらせ大笑いするのだった。ペドロは、注のこういった下卑た笑いが嫌でたまらなかった。注がこんな風に笑うと、八歳の少年は、なんとなく自分がこの中国人のじいさんに利用され、もてあそばれているように感じた。それに、読まされているこのぼろの本が何を語っているのかおぼろげながらも感じ取っていた。あれらの見知らぬ語句は、注の手のひらに一つずつ綴られてゆくに従ってだんだん脳の奥深くでつながりを持ち、よくはわからないがぼんやりとした意味が次第に形を現してきた。注はますます多くの文字を手のひらに書くように要求し、ペドロが一文字一文字手のひらに書きつけるたびに、注のほとんど毛のなくなった眉と眉のあいだにいつそう奇妙な表情が現れるのだった。¹²⁾

これまでの中国語による文学作品における華僑、とく老華僑のほとんどは美しいイメージをもっていた——家族や親戚のためにこつこつと働く。少しずつ金をためて自分自身や周りの人々を豊かにしていく。忘れ難い故郷に送金を続ける。年をとるにつれて「葉落帰根」（葉落ちて根に帰る。異国や他郷に暮らす人もいずれは故郷に帰るとえ）の思いを募らせる……。彼らは健康的で、上品で、気高い印象をさえ読者に与えてきたのである。まるで「文化大革命」の文学作品に現れていた完璧な人間を意味する「高・大・全」の主人公たちのように。

しかし、巖歌茶の作品は違う。ここに登場してきた年老いた独り身の華人(中国大陸流に言えば、アメリカに生きる老華僑となるが)の注は背もそれほど高くなく(「高」ではない)、大きな体をしているわけでもない(「大」でもない)。なによりも立派な人格の持ち主を含意する「全」のタイプの間人ではまったくない。それどころか、むしろ「高・大・全」とは正反対のことを、彼は八歳のメキシコ人少年にさせている。つまり、性描写を売り物にする「成人向け読み物」を未成年者に読ませているのである。そして「彼女のそのピンク色の乳首はまるで二粒のイチゴの飴のよう」、「唇がゆっくりと這い上がり、舌先がまず新鮮な乳首を味わった」¹³⁾、「水は彼女の肩に沿って流れ落ち、彼女の胸、彼女の丸い腹をつたっていった。彼女の身体は一枚の薄い水のカーテンの下でかすかに波打ち始めた」¹⁴⁾、「彼の手がそっと彼女の絹のようなひんやりとしたすべすべの肌をなでると、そのやわらかな身体はもう半ば溶けかかっていた……」¹⁵⁾といった例の千篇一律のポルノ小説が一樣に踏襲する陳腐な描写を貪るように読む(実際、視力を失いつつある注はペドロ少年を利用してそれを読ませている)ことによって自らの性的欲求

を満たす注はいかにも品位に欠けた人物像であった。その姿は醜悪そのものであった。

巖歌苓は、小漁のような美しい華人（中国人）像と、注のような醜い華人（中国人）像の構築を通して華人（中国人）社会の種種相をとらえようとしていたのであろう。

（2）少数民族へのまなざし

巖歌苓の作品に登場する中国系の人物は漢民族出身者がほとんどであるが、少数民族出身の主人公の出番が皆無というわけでもない。

老金は本名を金某と言った、全部で四文字の名前だ。この名を呼べば、十人のチベット人が振り返るような、そんな名前である。しかし文秀にはその名が覚えられなかった。老金は老金だ、そのほうがみんなにも便利だ。老金は四十幾つだが、見た目はもっと老けていた。チベット族は生年月日を覚えていないので、実のところ三十代なのか五十代なのかわかりはしないのだった。老金はこの辺りの年取った職工のように、少しばかりの財産を持っていたりはしなかった。老金は腕時計や万年筆すら持たず、財産といえば例の金歯一本だけ。母親の形見だった。母親は臨終の間際に、自分が死んだらすぐに金歯を使うようにと老金に言った。さもないと葬儀屋に持ち去られてしまう。老金は刀で金歯を抜き取った。その後、なんでも象嵌でできる刀匠が、刀に象嵌するのと同じやり方で歯を埋め込んでくれたのだ。¹⁶⁾

巖歌苓の代表作の一つに数えられ、映画化もされた「天浴」（日本語題「シュウシュウの季節」）に登場してきたヒーローは上記のチベット人老金である。その金歯などに関する描写のみをみれば、老金のことをやや戯画化しているように見受けられるかもしれないが、全体的に見てみると、巖歌苓は老金を英雄視し、彼を草原の誇り高き人として描いていることがわかってくる。現に「老金が投げ縄で馬を捕まえる妙技を目にした者にとっては、そうだった。全身が縄の動きにつれて悠然と弧を描いたかと思うと、馬はもう一歩も走れなくなっているのだ。数百里四方の馬場には、彼ほどの腕を持つ男はひとりもいなかった」¹⁷⁾のである。もっとも、コンポジションやプロットなどのために、巖はこの小説で老金を性的不能者として女学生文秀との共同生活を営ませるが、文革中の「上山下郷」運動の対象の一人として辺鄙なチベットに送られてきた文秀を、元軍人の物売りや「次々と暗闇から現れるだれとも知れぬ男たち」¹⁸⁾は妊娠させたにもかかわらず、その責任をとろうとする者は一人も現れなかった。老金こそが文秀の最期を見届けた男である。そうした「次々と暗闇から現れるだれとも知れぬ」無責任な男たちとは対照的に、老金はもっとも男らしい男、つまり、真の男として読者の目に映るのである。

再び車が動きだしたとき、女がひとり曲がり角に現れた。

「車に乗せてください」彼女は言った。

大抵のチベット族は漢語が話せないが、この台詞だけはだれもが話せた。彼女はまっすぐにわたしたちを見てはいなかった。くねくねと身体を左右に振じっている様子は、甘ったれているようでもあり、だらしなくも見えた。車中の全員が「停まれ」と叫び、ついにひとりが勇気を奮ってわれわれの気持ちを代弁した。

「なんて綺麗なチベット女だろう」(中略)

山をおりると、雪が降りだした。六月の雪はここでは珍しくもなかった。曲がり角に、再び彼女が現れた。車はスピードを落とし、運転手はわたしたちが何か言うのを待った。しかしわたしたちは積み荷のようにおし黙っていた。

彼女は数歩追いかけてきたが、車は彼女の肩先を掠め、さっと行き過ぎた。あてのはずれた盲目の少女は地に倒れ、リンゴが全部雪の上におちまけられた。リンゴの赤い色は、まるで雪にできた爛れた潰瘍のように、うす汚れて見えた。¹⁹⁾

チベット少女がヒロインの短篇小説「紅蘋果」(日本語題「リンゴ売りの盲目の少女」)を通して、巖歌茶は漢民族とチベット族の間における理解の難しさ、言い換えれば、異文化間コミュニケーションの難しさを問題点として提示している。そして全体的に見てみた場合、「天浴」などと同じように、チベット族を含めた少数民族に注がれた巖歌茶のまなざしは温かい。

さらに上記の、「紅蘋果」の書き出し部分と終わり部分において、リンゴ売りの盲目の少女はいつも次の目的地を目指して道中をさまよう。漢民族の車に乗せてもらえれば早く移動できるが、そうでない場合は自分自身の力(その足)で移動するしかない。いずれにせよ、不安定な要素の多いその移動が読者に深い印象を残すことになる。

ここから次の目的地を目指して移動し続ける遊牧民族のことを連想しても不思議ではないだろう。巖歌茶は異国で中国語による創作を続ける華文文学作家たちを「中国文学の遊牧民族」に譬えたことがある。この譬えと彼女における上記の「紅蘋果」のようなチベット体験とはけっして無関係ではない。巖歌茶、この質的にも量的にもすぐれた作品を世に送り続け実力ナンバーワンの華文文学作家を対象としている世界中の多くの研究者にとって、「中国文学の遊牧民族」説がその世界に入る重要な鍵となるかもしれない。

注

- 1) 6) 7) 8) 16) 17) 18) 19) 巖歌荅著・阿部敦子訳『シュウシュウの季節』（角川書店、1999年）
227頁、196頁、225～226頁、230頁、8～9頁、9頁、22～23頁、136～145頁。
- 2) 2001年8月6日付の『北京青年報』。
- 3) 友友『她看見了兩個月亮』（時代文芸出版社、1995年）285頁。
- 4) 『アジア遊学』第94号116～117頁。
- 5) 2009年4月17日付の『人民日報海外版』。
- 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 季刊『中国現代小説』第Ⅱ卷第15号9頁、20頁、16頁、14～21頁、
14頁、16頁、15頁。

付記：本稿は平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：20520322）の交付を受けて行った研究成果の一部である。